

「教育活動としての部活動」を実現するための 指導プログラムの開発

—学習指導と生徒指導の観点から—

来田宣幸*
吉田浩之** 原田隆史***

抄録

本研究では、中学生および高校生を対象として部活動における学習目標の到達度を評価する尺度を作成することを第1の目的とした。先行研究の結果に基づいて作成された54問の質問紙を用いて5,735名の中学生および高校生を対象とした横断的な質問紙調査を実施した。因子分析（最尤法、Promax回転）の結果、「友人」、「専門性・競技力」、「ルール・マナー」、「貢献」、「支援」、「公正さ・配慮」の6つの因子が得られた。学年との関係について検討した結果、貢献は中学生および高校生ともに3年生が他の学年と比較して有意に高い値を示した。性差に関しては、専門性・競技力では男子は女子と比べて高い値であった。また、中学生では、友人、ルール・マナー、支援で女子が有意に高い値を示し、公正さ・配慮では中学生および高校生ともに女子が有意に高い値であった。また、所属する部活動の種類による違いを検討した結果、有意な主効果がみられた。以上の結果から、部活動における学習目標を概念的に整理することができ、部活動場面における生徒の理解と豊かな部活動の発展に対して、新たな視点からの貢献ができるといえる。また、部活動学習目標到達度尺度と部活動におけるいごちち尺度との関係を検討した結果、専門性・競技力、貢献、支援と部活動不安感には有意な関係は認められなかったが、友人、ルール・マナー、公正さ・配慮は不安感と有意な負の相関がみられ、部活動を通じた活動によって生徒指導への有用性が示唆された。さらに、縦断的な指導介入調査によって、中学生ではすべての学習目標において有意に高い値となり、高校生では、ルール・マナー、貢献、支援、公正さ・配慮において有意な上昇がみられた。

キーワード：横断的調査、縦断的調査、部活動

* 京都工芸繊維大学 〒606-8585 京都府京都市左京区松ヶ崎御所海道町

** 琉球大学 〒903-0213 沖縄県中頭郡西原町字千原1番地

*** ビジネス・ブレイクスルー大学 〒102-0084 東京都千代田区二番町3番地

Development of guidance program for implementing the school club activities as educational activities

—From the point of view of teaching and student guidance —

Noriyuki Kida*

Hiroyuki Yoshida**

Takashi Harada***

Abstract

A scale to assess junior high school and high school students' goal orientation for school club activities was developed. Junior high school and high school students (n = 5, 735) responded to a questionnaire consisting of 54 questions that were developed based on previous studies. Results of factor analysis using the maximum likelihood method and promax rotation identified six factors: Friends, Expertise and Competitiveness, Rule and Manor, Contribution, Support, Fairness and Consideration. The results on the effects of the grade given to the level of achievement-oriented of club activities showed significantly higher in grade 3 compared to grade other in the Contribution. With respect to gender differences, male were higher than the female in the Expertise and Competitiveness. Female were higher than the male in Friends, Rule and Manor, Contribution, Support, Fairness and Consideration. These results suggested that it was possible to organize the conceptual level of achievement-oriented activities, for the development of its activities in the scene and a rich understanding of student club activities, and could contribute from a new perspective. In addition, as a result of examining the relationship between Scale of Comfort in Club Activities and Scale of Goal Orientation for School Club Activities, there were not significant correlation between anxiety and Expertise and Competitiveness, Contribution, Support. But there were significant negative correlation between anxiety and Friends, Rule and Manor, Fairness and Consideration, usefulness to the student guidance has been suggested by the activities through the club activities. In addition, by longitudinal guidance intervention research, it becomes significantly higher values in all of the learning objectives in junior high school, Rules and Manor, Contribution, Support, a significant increase was observed in Fairness and Consideration in high school.

Key Words : Cross-sectional study, Longitudinal study, Club activities

* Kyoto Institute of Technology, Gosyokaido-cho, Matsugasaki, Sakyo, Kyoto 606-8585

** University of the Ryukyus, 1, Sembaru, Nishihara-cho, Nakagamigun, Okinawa 903-0213

*** Business Breakthrough University, 3, Nibancho, Chiyoda-ku, Tokyo 102-0084

1. はじめに

近年、社会は大きく変容し、若者に求められる能力も大きく転換している。従来は、試験等で計測可能な知識や基礎学力などいわゆる近代型能力が評価されていた。しかし、グローバル化した社会を生き抜くためには、単なる知識や学力だけでは不十分であり、いわゆるポスト近代型能力と呼ばれる総合的な人間力が要求され、知識を現場で実践的に応用する力が重視される時代となった（本田 2005）。

このような観点から学校教育を概観すると、中学や高校で実施されている部活動は、競技力や専門性といった具体的な成果が求められ、それと同時に集団の中で個性を伸ばしつつ、人間的な成長も期待されている。したがって、ポスト近代型能力を涵養するには有効な機会と捉えることができる。しかし、現在の部活動には、顧問の体罰を含む人権を無視した指導、勝利至上主義や非科学的根性主義などに基づく長時間練習による傷害の多発、少数精鋭の選手中心主義による落ちこぼしなど、数多くの問題が存在し、また、教員によるボランティアに近い形で支えられている点など、特に近年顕在化してきた。

この背景には、部活動は学校教育の一環として長く存在してきたが、教育課程の中に明確には位置づけられず、制度的基準や教育的意義の規定がなく、部活動の教育目標が不明確であった点が挙げられる（中澤 2011；来田・吉田 2012）。2008年の学習指導要領改訂で初めて、部活動の意義が記載され、教育課程との関連が図られるよう留意すべきとされた。しかし、各教科や特別活動などは学習指導要領に目標・内容が規定されているが、部活動の目標・内容は記載されていない。学校における教育活動を機能させるためには、「学習指導」と「生徒指導」の観点が重要になる。しかし、部活動にはこのどちらについても規定や実践事例の蓄積がなされていない。

学習指導と一体となる学習内容については、多様な部活動に共通する教育的意義を検討し、達成目標を具体化する必要がある。すなわち、「部活動を通してどのような人間を育むか」等を整理し、教育目標および学習内容を体系化することが重要となる。部活動に参加する生徒を対象とした部活動の目的や意識に関する研究を通して、「達成動機・競技価値観」「精神的強靱さ」「勝利志向性」「精神統制力」の4因子から構成される「競技スポーツへの態度・意識」尺度（青木 2003）や「競技的成功」「自己顕示」「運動による心身への効果」「運動そのものの楽しさ」「鍛錬」「挑戦と承認」「親和」の7因子から構成される尺度（山本・城後 2009）などがみられる。また、部活動の学習内容に相当する項目として

「チームメートへの支援」「チームメートとの親和・友情」「集団への貢献」「規範意識」「競技力・専門性」の5因子から構成される「部活動の志向・達成度尺度」（来田・吉田 2012）や「チームでの存在感・居場所」「他者に対する優しさ」「楽しさ・気分の良さ」「向上のための努力・継続性」「チームの雰囲気・伝統形成」の5因子から構成される「部活動の意識・感情側面における志向・達成度」尺度（来田・吉田 2013）などもみられる。部活動における学習内容や学習目標については、先行研究によって捉える内容が異なっており、全体的な整理が不十分な状況である。そこで、部活動を学習活動として位置づけるために、部活動の学習目標を整理し、その到達度を自己評価することができる尺度を作成することは重要である。

次に、生徒指導の観点から考えると、部活動において、これまでに重大ないじめ事件が発生している。2010年7月、私立高校1年の男子生徒がいじめを受けたと訴えるメールを残して自殺をした。このとき、剣道部の3年生数人が「部活動の指導」として、下級生を平手打ちや正座などをさせており、学校側が「部活動の上級生から行きすぎた指導があった」ことを認めた。また、2006年10月には市立中学校2年の女子生徒が自宅で首をつって自殺した。本人の遺書には所属するバスケットボールクラブのチームメートの名前が記され、学校長はチームメートからいじめがあったことを認めた。このように学校においていじめなど生徒指導に関する問題については、学級内だけでなく部活動においても多く発生しているものの、部活動と教育活動との関連が不明確であるため、これまで踏み込んだ対策や指導が実施されにくい現状にあった。

生徒指導上、学校教育における心理教育的援助サービスには3段階に整理されている（石隈 1999）。「一次的援助サービス」は「すべての生徒」がもつ援助ニーズに対応するものであり、多くの生徒が遭遇する課題を予測して事前に援助するサービス（予防的援助）と生徒が学校生活を送る上で必要とする適応能力の開発を援助するサービス（発達促進的援助）がある。「二次的援助サービス」は、登校をしぶる、学習意欲が低下してきた、友人ができにくい等、特別の配慮を必要とする「一部の生徒」への援助である。「三次的援助サービス」は、長期欠席、いじめ等、特別な援助が個別になされる「特定の生徒」への援助である。

学級における心理教育的援助サービスのニーズを評価するための方法には、学級満足度尺度（河村 1999）など多くの尺度が開発されており、これらの尺度を参照して部活動における援助ニーズを評価する「部活動のいごこち尺度」が開発された（吉田・

来田 2013)。この尺度は部活動におけるいごちを存在感と不安感の両面から評価し、生徒指導上の注意が必要となる生徒への早期対応を目指すものとして作成されている。

部活動を教育活動として捉えるためには、このような生徒指導の観点が必要であるが、その全体像については不明であり、明らかにする必要がある。また、生徒指導上の問題と学習指導上の到達度との関連についてもこれまで明確にされていない。部活動において、どのような学習目標を到達しようとするのが生徒指導上の課題が発生しないようになるかなどは非常に重要な知見となり得る。また、学習指導と生徒指導については、横断的な調査だけでなく、実際に指導をおこない、その教育内容によって生徒にどのような変化が生じたかが重要になるため、縦断的な調査が必要となるが、これまで定量的な追跡調査は多く実施されていない。

2. 目的

本研究の第一の目的は、部活動の教育目標の達成度を自己評価するための「部活動の学習目標到達度尺度」を作成することである。そのために、来田・吉田（2012）と来田・吉田（2013）で作成された質問項目 45 項目と新たに項目を追加して横断的な調査を実施し、因子分析により因子構造を再構築し、部活動の種類や性別、学年などによる違いを明らかにする。

第二の目的は、生徒指導の観点から生徒を評価するものとして「部活動におけるいごち尺度」（吉田・来田 2013）を用いて、横断的調査によって部活動の学習目標到達度尺度との関係を明らかにする。

第三の目的は、部活動による教育的効果を評価するために、部活動の学習目標到達度尺度と部活動におけるいごち尺度を用いて生徒の変化を捉える縦断的な調査を実施することである。

3. 方法

1) 調査対象者

横断的調査としては、全国の公立私立中学校 125 校の生徒 3, 759 名（男子 2, 392 名、女子 1, 367 名）、公立私立高等学校 83 校の生徒 1, 976 名（男子 1, 406 名、女子 570 名）を対象とした。質問項目への記入もれやミス、すべて同じ番号に回答するなど尺度への回答に抵抗が考えられるものを除いた。

縦断的調査としては、中学生 404 名（男子 284

名、女子 120 名）と高校生 290 名（男子 187 名、女子 103 名）を対象として実施した。

2) 調査内容

部活動の学習目標到達度尺度として、「部活動の行動側面における志向・達成度尺度」（来田・吉田 2012）の 23 項目と「部活動の意識・感情側面における志向・達成度尺度」（来田・吉田 2013）の 22 項目に新たに項目を追加して独自に作成した合計 54 項目の質問紙を用いた。「部活動に関する質問項目に対して、自分の気持ちに近い数字に○をつけてください」という問いに対して、「1. 全くない（全くそう思わない）」「2. あまりない（あまりそう思わない）」「3. どちらともいえない」「4. ときどきある（少しそう思う）」「5. よくある（とてもそう思う）」の 5 件法で回答を求めた。

部活動のいごち尺度としては、吉田・来田（2013）による部活動内での存在感と不安感の評価するそれぞれ 4 項目の質問紙を用いた。

3) 調査時期と実施方法

調査の手続きとしては、調査対象者が在籍する部活動単位で、部活動の時間を用いて集団で実施した。質問紙実施方法の説明を学校に郵送あるいは直接渡して、部活動顧問が質問紙を配布し、その場において回答を求め、回収した。また、調査が学校の成績に一切関係がないことや回答によって不利益は生じないことを回答前に説明した。

縦断的調査については、部活動の顧問に対して部活動指導上の研修会を 2 ヶ月に 1 回、合計 4 回実施し、その 1 回目と 3 回目の研修後に生徒への質問紙調査を実施した。実施内容および手続きは横断的調査と同一のものであった。部活動指導上の研修会では、部活動の意義や留意点などを説明し、生徒に対して目標設定や振り返りのための記述ワークブック等の説明をおこなった。

4. 結果及び考察

1) 横断的調査

・部活動の学習目標到達度尺度の因子分析

まず「部活動の学習目標到達度尺度」を構築するために、2284 名のデータを用いて因子分析をおこなった。項目の内容が「自分・個人」に関する観点と「他者・集団」に関する観定の 2 種類に整理し、それぞれ因子分析（最尤法、プロマックス回転）をおこなった結果、固有値の減衰状況と解釈可能性からそれぞれ 3 因子 15 項目が抽出された（表 1）。自分・個人に関する観定の第 1 因子は、「チームメー

トに会うのが楽しい」「チームメイトとの友情を深め、思い出をたくさんつくっている」など、友人との親和に関連する5項目であったことから「友人」と命名した。第2因子は、「大会で好成績、好結果をおさめようと自分から選んできつい練習を取り入れている」「上達するために、陰ながら努力をしている」など、競技力を向上させたり、専門性を高めたりすることに関連する5項目であったことから「専門性・競技力」と命名した。第3因子は、「他からみても、マナー、礼儀が身についている」「場、時、状況などに応じたあいさつが身についている」など、ルールやマナーを守り自らを律する行動と関連する5項目であったことから「ルール・マナー」と命名した。これら3つの因子は、部活動を通した

教育効果として、生徒自分自身の資質の向上に繋がる重要な要素であるといえる。

他者・集団の観点の第1因子は、「ここぞ、というときに活躍が期待されることが多い」「部の関係者や地域の方などから、チームが良い評価をされることに自分が貢献しているといわれることがある」など、チームや集団に対して貢献する行動に関連する5項目であったことから「貢献」と命名した。第2因子は、「チームメイトに部活動以外の場面でも、進んで協力している」「チームメイトの部活動以外のことについても、気づいたことはそれぞれに伝えている」など、チームメイトに対するサポートに関連する5項目であったことから「支援」と命名した。第3因子は「誰にでも分け隔てなく公平に接している」「意見が対立しても感情

表1 部活動の学習目標到達度尺度 (因子分析結果)

自分・個人の観点					
項目	F1	F2	F3	平均値	
第1因子 友人 ($\alpha=.861$)					
・ チームメイトに会うのが楽しい。	.857	-.017	-.051	4.4±0.8	
・ チームメイトと付き合うことは、自分にとって大きなプラスになっている。	.772	.055	-.009	4.4±0.8	
・ 励ましてくれたり、多くのことを学べる、頼りになるチームメイトがいる。	.730	-.066	.032	4.5±0.8	
・ 自分の悩みや困りごとを、気軽に相談できるチームメイトがいる。	.697	-.083	.062	4.2±1.0	
・ チームメイトとの友情を深め、思い出をたくさんつくっている。	.656	.109	-.001	4.4±0.8	
第2因子 専門性・競技力 ($\alpha=.813$)					
・ 大会で好成績、好結果を収めようと、自分から進んできつい練習を取り入れている。	-.027	.771	-.030	3.8±0.9	
・ 上達するために、陰ながらの努力をしている。	-.025	.721	.014	3.8±0.9	
・ レギュラーになり、目立つ活躍をして、注目されたり、表彰されたりするように、人一倍がんばっている。	.109	.696	-.045	3.6±1.0	
・ 自分の目標と毎日の練習内容がつながるように、練習計画を綿密に立てることができる。	-.056	.685	.070	3.3±1.0	
・ 専門的スキル、体力、知識について、詳しくなる事に関心があり、それについて自分から調べている。	-.031	.488	.076	3.4±1.1	
第3因子 ルール・マナー ($\alpha=.757$)					
・ 他から見ても、マナー、礼儀が身についている。	-.030	-.052	.829	3.8±0.9	
・ 場、時、状況などに応じた、あいさつが身についている。	.013	.020	.667	4.2±0.8	
・ 誰かに言われなくても、きまり、約束、時間を守っている。	.085	.116	.497	4.0±1.0	
・ 我慢やすべきことなど、自分の意思で自分をコントロールして、することができている。	.053	.216	.343	3.8±0.9	
・ 計画的で規則正しい生活や行動ができ、健康管理や体調管理ができている。	-.004	.211	.316	3.6±1.1	
因子間相関	F1	.499	.531		
	F2		.667		
他者・集団の観点					
項目	F1	F2	F3	平均値	
第1因子 貢献 ($\alpha=.900$)					
・ 試合で、ここぞ、というときに、活躍が期待されることが多い。	.873	-.083	.017	2.8±1.1	
・ チームの好成績や好結果に貢献していると言われることがある。	.859	.012	-.019	2.8±1.0	
・ チームがピンチのときには、活躍が期待される方である。	.785	-.024	.034	2.8±1.0	
・ 他の学校のチームから、自分のチームがよい評価をされることに、自分が貢献していると感じることがある。	.766	.064	-.013	2.7±1.0	
・ 部の関係者や地域の方などから、チームがよい評価をされることに自分が貢献していると言われることがある。	.696	.097	-.019	2.8±1.0	
第2因子 支援 ($\alpha=.826$)					
・ チームメイトに部活動以外の場面でも、進んで協力している。	-.078	.763	-.008	3.8±0.9	
・ チームメイトの部活動以外のことについても、気づいたことは、それぞれに伝えている。	.044	.699	-.066	3.5±1.1	
・ チームメイトのよいところに、すばやく気づいて、認めたり、ほめたりできている。	-.023	.692	.071	3.9±0.9	
・ 悩んだり、困ったりしているチームメイトに、進んで声をかけ、相談にのっている。	.108	.589	.038	3.5±1.0	
・ チームメイトそれぞれの活躍を、喜び合う雰囲気をもたせるのに、貢献している。	.170	.573	.014	3.7±1.0	
第3因子 公正さ・配慮 ($\alpha=.746$)					
・ 言われて嫌そうなこと（配慮に欠けること、傷つくことなど）は、チームメイトに決して言わない。	.044	-.159	.820	3.9±1.0	
・ 誰にでも分け隔てなく公平に接している。	-.014	.125	.555	4.0±0.9	
・ まじめに取り組んでいるチームメイトを、冷やかしたりバカにしたりしていない。	-.041	-.002	.553	4.3±1.0	
・ 意見が対立しても、感情的な様子をみせたりしていない。	.037	.026	.506	3.5±1.1	
・ どのチームメイトの話でも、最後まで丁寧に聞いている。	-.045	.298	.464	4.0±0.9	
因子間相関	F1	.613	.346		
	F2		.624		

的な様子をみせたりしていない」など、相手に対する配慮などに関連する5項目であったことから「公正さ・配慮」と命名した。これら3つの因子は、生徒が社会を構成する一員として育むべき資質の側面と捉えることができ、部活動を通して社会的な存在としての価値を高めることが、部活動の重要な教育内容の1つであると考えることができる。

Cronbach の α 係数を算出したところ、友人、専門性・競技力、ルール・マナー、貢献、支援、公正さ・配慮の順に、.861、.813、.757、.900、.826、.746 であり、いずれの因子も満足できる信頼性が確認された。したがって、これらの6因子に基づき、各因子を構成する5つの項目の平均点を各因子の合成得点として採用し、部活動の学習目標到達度を構成する下位尺度の得点とした。

・学年、性別、部活動の種目による違いの検討

部活動の学習目標到達度およびいごこち尺度について、学年および性別の平均値を表1に示した。学年と性を被験者間因子とする2要因分散分析をおこなった結果、中学生では、ルール・マナーに有意な交互作用がみられた。そこで単純主効果を検討し

2年生および3年生では女子が男子より有意に高い値であった。ルール・マナーを除く5つの因子には有意な交互作用はみられなかったため、主効果を検討した。性については、貢献以外で有意な主効果がみられ、専門性・競技力は女子と比較して男子で有意に高い値であり、友人、支援、公正さ・配慮の3因子では男子と比較して女子で有意に高い値であった。学年については、支援以外で有意な主効果がみられたため、多重比較をおこなったところ、専門性・競技力と貢献は学年が上がるにつれて高い値となる傾向があり、1年生および2年生と比較して3年生で有意に高い値であった。これに対し、友人、公正さ・配慮では学年が上がるにつれて低い値となる傾向があり、1年生と比較して3年生で有意に低い値であった。

高校生では、専門性・競技力と公正さ・配慮で有意な交互作用がみられたため、単純主効果を検討した。その結果、男子では2年生および3年生と比較して1年生で有意に高い値であったが、女子では1年生および2年生と比較して3年生で有意に高い値であった。公正さ・配慮では、3年生では男女間に有意な差はみられなかったが、1年生および2年生

表2 学年、性別による検討

中学生	男子			女子			主効果		交互作用
	1年	2年	3年	1年	2年	3年	性	学年	
	n=1063	n=1043	n=286	n=586	n=535	n=244	F値	F値	
学習目標到達度尺度									
友人	4.29±0.69	4.18±0.79	4.04±0.91	4.42±0.65	4.35±0.74	4.32±0.81	45.13 **	11.89 **	1.99
専門性・競技力	3.58±0.77	3.53±0.83	3.64±0.87	3.50±0.71	3.44±0.71	3.53±0.83	9.71 **	3.92 *	0.08
ルール・マナー	3.90±0.68	3.83±0.74	3.88±0.84	3.92±0.63	3.98±0.65	3.98±0.75	11.03 **	0.22	3.11 *
貢献	2.70±0.90	2.81±0.96	3.02±1.02	2.73±0.77	2.75±0.78	2.92±0.88	1.59	16.60 **	1.58
支援	3.53±0.79	3.55±0.82	3.50±0.84	3.74±0.73	3.75±0.70	3.69±0.80	45.66 **	1.02	0.01
公正さ・配慮	3.92±0.71	3.82±0.75	3.69±0.82	4.12±0.62	4.07±0.62	3.90±0.71	68.20 **	19.52 **	0.36
部活動いごこち尺度									
存在感	3.80±0.83	3.83±0.88	3.86±0.97	3.97±0.73	3.92±0.75	3.95±0.83	13.82 **	0.34	0.92
不安感	1.95±0.82	2.02±0.85	2.05±0.93	1.79±0.74	1.86±0.76	2.01±0.89	15.61 **	7.96 **	1.26

高校生	男子			女子			主効果		交互作用
	1年	2年	3年	1年	2年	3年	性	学年	
	n=647	n=583	n=176	n=280	n=231	n=59	F値	F値	
学習目標到達度尺度									
友人	4.38±0.66	4.34±0.65	4.53±0.61	4.47±0.57	4.41±0.60	4.49±0.54	0.74	10.09 **	0.73
専門性・競技力	3.70±0.68	3.63±0.78	3.64±0.68	3.39±0.72	3.38±0.73	3.80±0.61	8.73 **	9.59 **	7.58 **
ルール・マナー	3.95±0.63	3.97±0.75	4.22±0.64	3.90±0.61	3.87±0.72	4.15±0.70	3.13	14.50 **	0.29
貢献	2.64±0.81	2.79±0.89	2.98±0.86	2.62±0.77	2.77±0.90	3.21±0.80	1.78	17.62 **	1.71
支援	3.64±0.72	3.62±0.76	3.78±0.70	3.73±0.70	3.72±0.82	3.83±0.67	3.04	11.92 **	0.09
公正さ・配慮	3.96±0.60	3.80±0.67	3.95±0.64	4.16±0.60	4.17±0.61	4.09±0.57	38.70 **	1.71	4.34 *
部活動いごこち尺度									
存在感	3.96±0.70	3.94±0.76	4.23±0.66	3.92±0.63	3.96±0.77	4.21±0.69	0.12	17.71 **	0.38
不安感	1.97±0.67	1.99±0.75	1.86±0.68	1.83±0.59	1.81±0.59	1.97±0.74	2.87	0.31	3.31 *

M ± SD; *, p < .05; **, p < .01

た結果、1年生では男女間に差はみられなかったが、
 2年生では男子と比較して女子で有意に高い値であった。

表3 部活動の種類による検討

	A野球 n=1065	Bサッ カー n=813	Cテニス n=740	Dバレー ボール n=277	Eバスケット ボール n=366	F卓球 n=288	Gバドミ ントン n=250	H陸上競 技 n=647	I武道 n=391	J文化部 n=582	F値	多重比較
学習目標到達度尺度												
友人	4.40±0.62	4.44±0.63	4.29±0.73	4.31±0.71	4.16±0.80	4.00±0.81	4.24±0.82	4.37±0.70	4.30±0.74	4.21±0.82	14.63 **	F<C,I,D,H,A,B; E<H,A,B; J<A,B
専門性・競技力	3.76±0.72	3.67±0.70	3.52±0.70	3.51±0.73	3.39±0.75	3.30±0.86	3.34±0.80	3.62±0.79	3.52±0.79	3.41±0.82	21.56 **	F<H,B,A; G,E,J<B,A; D,I,C<A
ルール・マナー	4.05±0.68	4.06±0.65	3.84±0.67	3.91±0.66	3.79±0.75	3.66±0.76	3.86±0.69	3.97±0.66	3.90±0.70	3.83±0.75	16.26 **	F<I,D,H,A,B; E,J,C<A,B
貢献	2.81±0.89	2.88±0.84	2.71±0.87	2.78±0.77	2.58±0.86	2.60±0.98	2.65±0.83	2.92±0.89	2.76±0.91	2.72±0.84	8.27 **	E<A,B,H; F,G,C<B,H
支援	3.70±0.72	3.68±0.74	3.62±0.79	3.69±0.71	3.50±0.80	3.29±0.86	3.55±0.73	3.76±0.77	3.68±0.79	3.50±0.80	13.34 **	F<C,I,B,D,A,H; E,J<A,H
公正さ・配慮	3.92±0.67	3.89±0.66	3.93±0.68	4.03±0.60	3.79±0.77	3.73±0.77	3.99±0.68	4.03±0.68	3.96±0.70	4.01±0.72	7.83 **	F<I,G,J,D,H; E<J,D,H
部活動いごち尺度												
存在感	3.94±0.75	4.03±0.75	3.91±0.79	3.90±0.67	3.78±0.81	3.63±0.91	3.81±0.87	4.02±0.77	3.87±0.82	3.78±0.85	11.18 **	F<C,A,H,B; E,J<H,B
不安感	1.95±0.78	1.98±0.79	2.01±0.77	1.85±0.74	1.98±0.82	1.96±0.86	1.98±0.81	1.91±0.74	1.96±0.75	1.81±0.80	3.48 **	J<C

M±SD; **p<.01

競技力・専門性および公正さ・配慮以外では有意な交互作用がみられなかったため、主効果を検討した。その結果、すべての因子で性に有意な主効果はみられず、学年に有意な主効果がみられた。多重比較の結果、ルール・マナーおよび支援では1年生および2年生と比較して3年生で有意に高い値であった。友人では2年生で有意に低い値であり、貢献では1年生で有意に低い値であった。

次に、部活動のいごち尺度の結果について示すと、中学生では有意な交互作用はみられず、性に有意な主効果がみられた。存在感では男子と比較して女子で有意に高く、不安感では男子と比較して女子で有意に低い値であった。また、不安感では学年にも有意な主効果がみられ、学年が上がるにつれて高い値となり、1年生と比較して3年生で有意に高い値となった。なお、存在感については値が高いほど望ましい状態であり、不安感については値が低いほど望ましい状態といえる。

高校生では、不安感に有意な交互作用がみられ、単純主効果を検討した結果、男子では1年生および2年生と比較して3年生で有意に低い値であったが、女子では1年生および2年生と比較して3年生で有意に高い値であった。存在感については有意な交互作用および性に主効果はみられず、学年にのみ有意な主効果がみられた。多重比較の結果、1年生および2年生と比較して3年生で有意に高い値となった。

次に、所属する部活動の種類によって異なるかを検討するため所属する部活動の種類を被験者間因子の説明変数とする1要因分散分析をおこなった(表3)。その結果、すべての部活動の学習目標の到達度といごち尺度で有意な主効果がみられた。なお、多重比較の結果については表中に示した。

・学習目標到達度尺度といごち尺度

次に、学習目標の到達度尺度といごち尺度との関係を検討するために相関係数を算出した(表4)。なお、調査対象者が所属する部活動のチーム単位で平均値を求め、個人間の関係とチーム間の関係を検討した。その結果、存在感については、すべての部

活動の学習目標到達度尺度との間に有意な正の相関がみられた。この結果は、個人およびチームのどちらにも共通したものであった。また、相関係数の値も個人については、0.4以上の中程度であり、チームについては0.8程度と比較的強い関係を示すものであった。

一方、不安感については、個人では貢献を除く5つの因子で有意な負の相関がみられ、チームでは友人、ルール・マナー、公正さ・配慮において有意な負の相関がみられた。競技力・専門性および支援については、個人では有意な相関となったが、調査対象者数が非常に多いため、有意な相関となったものと思われ、相関係数の値としては、.01程度であり、非常に弱い関係であるといえる。有意な相関が得られた友人、ルール・マナー、公正さ・配慮についても、相関係数の値から評価すると弱い関係であるが、部活動に所属する生徒の不安感を低減させることは生徒指導上、非常に重要な課題であり、この観点において専門性・競技力および貢献や支援などの部活動指導と不安感については、独立しており関係がみられなかったことは重要な点である。チーム内における友人関係やルール・マナーの徹底、公正さ・配慮の醸成などの観点から顧問等が指導することによって、生徒指導上の課題を有する生徒に対しても適切な指導がおこなえる可能性を示唆するものである。

表4 相関関係

学習目標到達度尺度	部活動いごち尺度			
	存在感		不安感	
	個人	チーム	個人	チーム
専門性・競技力	.508**	.805**	-.027*	-.038
友人	.630**	.843**	-.295**	-.234**
ルール・マナー	.516**	.818**	-.111**	-.175*
貢献	.564**	.730**	-.009	.050
支援	.659**	.892**	-.067**	-.049
公正さ・配慮	.421**	.818**	-.189**	-.210**

*.p<.05; **.p<.01

・部活動指導プログラムの提案

以上より、部活動を教育活動と位置づけるために部活動を通した学習内容を整理すると、大きく6つ

の因子構造として捉えることができる。質問項目は30項目で構成され、簡便に実施することが可能である。また、部活動におけるいごち尺度は8項目であり、これら2つをあわせた38項目による評価は、部活動に取り組む生徒の状態を把握し、フィードバックする資料を得ることができると同時に、生徒に対する部活動指導法を開発する上での効果が期待できると考えられる。これらの尺度を用いた評価には日常的な観察や実感が反映されやすく、実態を反映したフィードバックの資料となることが期待できる。

具体的な手順としては、本尺度の各項目を観点別評価規準内容と位置づけると、部活動における生徒の様子を評価・把握する実践的な観点になり得ると考えられる。また、生徒からすると、具体的な評価規準内容は、部活動における取り組みを意識しやすく、自己評価もしやすい。したがって、これらの項目を用いて部活動全体で取り組む方法は実践的であり、部活動を通じた教育活動を実践に効果的に対応できる可能性があるといえる。

2) 介入による縦断的調査

・部活動の学習目標到達度尺度

本尺度を用いた教育効果に関する実践的介入調

査として、実際に中学生と高校生を対象として部活動の顧問に対する指導を実施することによる生徒の変化を調査した。部活動顧問に対して、目標設定と日常的な目標達成管理シートを使用し、専門の競技力や専門性を高めるだけでなく、教育活動を意識し、部活動を通して個人としての自立および社会を構成する一員としての資質を高めるようミーティングなどにおいて積極的に実践するよう指導した。

指導前後に pre テスト、post テストとして本調査を実施した。性を被験者間因子、取り組みの実施前後を被験者内因子とする2要因分散分析をおこなった(表5)。その結果、中学生では、支援において有意な交互作用がみられたため、単純主効果の検討をおこなった。その結果、男女ともに有意な上昇がみられたが、男子でより顕著な増加であった。支援以外には有意な交互作用はみられなかったため、主効果を検討したところ、すべての因子において性に有意な主効果はみられず、前後で有意な主効果がみられ、post テストで有意に高い値となった。

高校生では、専門性・競技力、友人、公正さ・配慮に有意な交互作用がみられたため、単純主効果を検討した。専門性・競技力に関しては、女子では有意な上昇はみられなかったが、男子では取り組み実践後に有意に高い値となった。友人については、取

表5 縦断調査の結果

中学生	男子(n=284)		女子(n=120)		主効果		交互作用
	pre	post	pre	post	前後	性	
学習目標到達度尺度							
友人	4.24±0.72	4.37±0.62	4.30±0.74	4.31±0.78	3.89 *	3.50	0.00
専門性・競技力	3.51±0.74	3.61±0.73	3.51±0.71	3.56±0.66	4.45 *	0.32	0.12
ルール・マナー	3.78±0.69	3.95±0.63	3.81±0.61	3.86±0.62	11.61 **	3.35	0.29
貢献	2.63±0.94	2.91±0.88	2.70±0.79	2.93±0.79	37.26 **	0.28	0.30
支援	3.49±0.76	3.74±0.72	3.69±0.77	3.84±0.64	29.65 **	1.73	4.61 *
公正さ・配慮	3.81±0.73	4.01±0.66	3.91±0.66	4.02±0.65	15.77 **	1.19	0.75
部活動いごち尺度							
存在感	3.75±0.83	3.96±0.75	3.92±0.73	4.00±0.70	11.31 **	2.30	2.19
不安感	2.11±0.69	2.09±0.63	2.15±0.73	2.10±0.64	0.74	0.13	0.17
高校生	男子(n=187)		女子(n=103)		主効果		交互作用
	pre	post	pre	post	前後	性	
学習目標到達度尺度							
友人	4.22±0.79	4.23±0.72	4.39±0.56	4.43±0.61	0.52	0.18	5.80 *
専門性・競技力	3.55±0.89	3.63±0.88	3.33±0.69	3.38±0.72	2.57	0.14	6.80 *
ルール・マナー	3.70±0.79	3.84±0.77	3.76±0.63	3.82±0.73	7.19 **	0.97	0.06
貢献	2.57±0.86	2.78±0.90	2.45±0.73	2.66±0.86	20.06 **	0.01	1.49
支援	3.49±0.83	3.65±0.81	3.55±0.70	3.73±0.76	16.63 **	0.08	0.62
公正さ・配慮	3.85±0.66	3.88±0.70	4.05±0.64	4.23±0.63	6.31 *	3.53	14.85 **
部活動いごち尺度							
存在感	3.73±0.76	3.91±0.72	3.81±0.73	3.81±0.84	3.69	3.76	0.02
不安感	2.09±0.65	2.17±0.70	1.81±0.52	1.87±0.50	3.42	0.02	19.91 **

M±SD; *,p<.05; **,p<.01

り組み実践前は男子と比較して女子で有意に高い値であったが、取り組み実践後には有意な差はみられなかった。公正さ・配慮では、男子では有意な変化はみられなかったが、女子では取り組み実践後に有意に高い値となった。また、有意な交互作用がみられなかったルール・マナー、貢献、支援については性に有意な主効果はみられず、取り組み前と比較して取り組み後に有意に高い値となった。

・部活動いごちち尺度

部活動の顧問に対する指導を実施することによる効果を検討するために、性を被験者間因子、取り組みの実施前後を被験者内因子とする2要因分散分析をおこなった。その結果、中学生では、有意な交互作用および性の主効果はみられなかった。指導前後については、存在感において有意な主効果がみられ、指導後に有意に高い値となった。高校については、存在感には有意な交互作用および主効果はみられなかったが、不安感に有意な交互作用がみられた。そこで、単純主効果を検討した結果、男女ともに取り組み実践後に値が高くなる傾向があり、女子と比較して男子でその傾向がより強い傾向がみられた。

5. まとめ

本研究では、部活動に取り組む生徒に対して、取り組み意識や目標の評価方法を開発した。その結果、6つの因子が抽出され、多様な目的意識を整理することができた。しかし、本研究で最終的に採用された尺度は、逆転項目を含まないものであり、質問項目の内容も全体に社会的望ましさの影響を受けやすいことから、特定の部員への観察や面接を通して追跡調査し、その結果を本研究の結果と比較するなど、多角的に研究を進めていくことは今後も引き続き実施していく必要がある。

また、縦断的な指導介入調査によって、学習目標到達度尺度の内容については値が有意に向上する因子が多くみられた。しかし、いごちち尺度においては、大きな変化はみられなかった。本研究の知見が学校現場で活用されるためには、本尺度の項目を用いた実践を行い、その結果、どのような効果がみられるのかを検討し、実践モデルを想定できるようにする必要があるといえる。本研究において調査対象となった生徒は比較的落ち着いた学校で熱心な顧問による指導がおこなわれているケースが多くみられた。厳しい状況に置かれている生徒を対象とした調査や実践なども蓄積していくことが必要となる。このように、本研究では未解決の問題も多く残されている。しかしながら、部活動における学習

目標が概念的に整理され、その到達度を評価する尺度が開発され、その実践による生徒の変化が明らかにされたことは、部活動における生徒の理解と豊かな部活動の発展に対して、新たな視点からの貢献ができると考えられる。

参考文献

- 青木邦男 (2003) 高校運動部員のスポーツ館とそれに関連する要因、*体育学研究*、48 : 207-223
- 本田由紀 (2005) 多元化する「能力」と日本社会—ハイパー・メリトクラシー化の中で、NTT出版
- 石隈利紀 (1999) 学校心理学—教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス、*誠信書房*
- 河村茂雄 (1999) 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発 (1) 学校生活満足度尺度 (中学生用) の作成、*カウンセリング研究*、32 : 274-282
- 来田宣幸・吉田浩之 (2012) 部活動における生徒の志向・達成度と学級満足度の関係、*身体運動文化論攷*、11 : 1-30
- 来田宣幸・吉田浩之 (2013) 部活動の意識・感情側面における生徒の志向・達成度、*身体運動文化論攷*、12 : 1-30
- 中澤篤史 (2011) 学校運動部活動研究の動向・課題・展望—スポーツと教育の日本特殊的関係の探求に向けて—、*一橋大学スポーツ研究*、30 : 31-42
- 山本雄介・城後豊 (2009) 高等学校における運動部活動のコーチングに関する一考察: 生徒の目的達成とコーチの関わり方に着目して、*北海道教育大学紀要教育科学編*、60 : 215-226
- 吉田浩之・来田宣幸 (2013) 部活動における生徒の援助ニーズを把握するための尺度の作成、*琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要*、20 : 31-41

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。

